

歴史ライヴ

# 坂本龍馬

編集・ディレクション ————— 植田博文・黒坂 勉・宇野恵信・武隈恵里左・河田美智子  
装丁デザイン・アートディレクション ————— 浅葉克巳  
レイアウト ————— 山本昌美  
本文写真撮影 ————— 竹内敏信  
カバー撮影 ————— 坂田栄一郎  
カバーモデルメイク ————— 木下ユミ  
カバーモデルカツラ ————— 水口誠也  
カバーモデル衣裳 ————— 森 良夫  
取材協力 ————— 近藤 勝・伏見寺田屋

## 歴史ライブ 坂本龍馬

昭和58年11月10日 初版発行

定価 1,400円

監修者 尾崎秀樹・福田紀一・光瀬 龍

発行者 福武哲彦

編集責任者 雨宮良夫

発行所 株式会社 福武書店

東京都千代田区麹町6-6 〒102

電話 03(230)2131

振替口座 東京9 37119番

印刷・製本 大日本印刷株式会社

© Fukutake Publishing Co., Ltd. 1983

シリーズコード ISBN4 8288 0300 9 C0321

坂本龍馬コード ISBN4 8288 0301 7 C0321

落丁・乱丁本はお取替え致しますので、当社までお送りください。



歴史ライブ

坂本龍馬

福武書店









**黒潮が夢のありかを教えてくれた。**

目の前にはいつも紺碧の、砕け散る荒々しい海があった。熱く血のように湧きたつ、黒潮の雄々しい流れがあった。その洋々たる海が、遙か彼方で未知の世界につながっていることを、幼い龍馬は知っていただろうか。







## 一人は土佐をとり、一人は世界をとった。

少年龍馬は、はなたれの、泣き虫の、寝小便たれだった。質実剛健という後のイメージとは、随分違っていただけだ。6歳違いの瑞山は、そんな龍馬を弟のようにかわいがった。二人は同志となり、やがて別れる。





山の向こうに、もう一つの海があった。

文久2年(1862)龍馬脱藩。土佐一国は、龍馬の舞台には小さすぎた。黄ばんだ山をこえて龍の夢は大きくはばたいていった、龍馬は海を捨てた。故郷の海を捨て、海への果てしない野心を取ったのだ。









それは巨大な、鉄のメッセージだった。

浦賀の海には見たこともない巨大な鉄の船が浮かんでいた。海の方から、それは圧倒的なメッセージであった。海岸警備にあたっていた19歳の龍馬の、さすがに旺盛な好奇心も、これを受けとめるには重すぎたろう。













## 先生は、海のすべてを持っていた。

刺しにいったはずの勝海舟に心服し、弟子になった、片腕になった。神戸の海軍操練所で過ごした日々は短い。しかし龍馬は、ここで海に関するすべてを学んだ。龍馬の目は新しい海を見ていた。志は形をもった。





**彼は革命家だったのか、夢多き商人だったのか。**

龍馬の棲むところは常に港だった。富と夢が入り交じる港だった。慶応元年(1865)長崎の豪商小曾根乾堂をパトロンに、亀山社中を設立。長崎。「世界の海援隊」は、ここから出航するはずだった。













奔馬の夢は、走りやまない。

その前月、大政奉還は成っていた。新政府のラフ・スケッチも、龍馬の頭には描かれていただろう。京の町を疾風のように暗殺団が駆け抜けた後も、奔馬は生きていた。33年を一瞬にして走り、次なる夢の中で生きていた。